

日蓮宗の傳來

——日蓮の西国布教願望と日像の活躍——

小林 定市

日蓮の西国布教願望と日像の活躍

弘安五年（一二八二）九月、氣候の激しい身延山（山梨県）での九年間の法華経信仰で、健康を害した日蓮は、身延山を下り常陸国に赴こうとして武蔵国池上（東京都大田区）で旅を続けることが出来なくなり六人の本弟子を定めて後事を託した。

当時、日蓮の教線は鎌倉を中心として、佐渡・越後・信濃・遠江国以来に限定された東国仏教であった。同年十月十一日、日蓮は入滅に臨み十三才の経一麿（日像）に、京都での布教を遺言し、同所で二日後に寂している。

日像（文永六〜康永元、一二六九〜一三四二、京都・妙顕寺開山）は、永仁元年（一二九三）の日蓮十三回忌を期して京都開教を決意し、日蓮の旧跡を歴訪し、身延山に登り日蓮の祖塔を拝し、越後から佐渡と北陸を巡り、永仁二年四月十三日に入京している。

四月二十八日には、御所の東門において京都開教を宣言し、四個格言を唱え、妙法を説く、日像の辻説法は過激なもので、洛中において折伏教

化をして教線を拡張すると、必然的に旧仏教系の比叡山並びに諸寺等の他宗の僧に憎まれ朝廷に訴えられた。

徳治二年（一三〇七）五月、朝廷は訴えを聞き入れ院宣により、日像は京都追放となり、土佐国幡多はかたえと配流になる。

日像真言僧を相手に三昼夜法論

配流の途中西国えの街道筋にあたる、京都府乙訓郡おとくに冠井庄かいで真言宗真言寺の住僧実賢と、真言宗極楽寺（嘉祥年間、藤原基経創建、京都市伏見区深草宝塔寺山町）の僧良桂の真言僧二人を相手に三昼夜法論し、二人は破れ信伏改宗し日像の弟子となった。

その後、真言寺は真教寺しんきょうじ（後、南真経寺）・極楽寺は宝塔寺ほうとうじと寺名を改め、二ヶ寺とも日像を開祖とし、実賢と良桂は二祖となり、関西における日蓮宗弘通最初の寺となった。

当時、福山市水呑町の真言宗寺院の僧、戒善院日行の師は、真経寺の実賢であった。実賢が日蓮宗に転じたことで、日行も師実賢と同じ日蓮

宗に転宗する。元真言宗寺院、重顯寺に伝えられた「諸宗問答集」の裏書には次のように記されている。

〔応長元年二月、「諸宗問答集」の裏書〕

一、諸宗問答集、一卷、実賢の口入により、拜写し奉るものなり。
一、外に、日像聖人御本尊一幅を、改宗の褒美として遣わさるところなり。洛西乙訓郡鶏冠井村の実賢は、本来余の師兄たるなり。
像師（日像）彼の僧（実賢）に命じて、法華の深義を示す、余（日行）信伏随従し、忽ち密宗（真言宗）を捨て、一乘（日蓮宗）に帰す、茲により件の重宝を感得し奉るものなり。
時に、応長元（一二三二）仲陽（二月）良日

戒善院日行

「水呑町史・重顯寺文書」

また、清光山重顯寺創立略縁起は、「応長元年三月五日、戒善院日行上人之を建つ、往古は真言宗なり。（以下略）」と記している。

日像は帝都開教を達成するため、正応三年（一二九〇）四月、法華經二十八巻を書写し、酷寒の夜、由井ヶ浜で百日の塩垢離の荒行を終え、正応五年には『秘蔵集』三巻を著している。この『秘蔵集』の写と推定される『秘蔵録』三巻が南真経寺に伝えられていて、重顯寺の『諸宗問答集』も南真経寺の『秘蔵録』の写しであろうと推定されている。

日像の後継者妙実（大覚）

妙実（号、大覚、弘安七年生カ）貞治三年、？一二八四〜一三六四。初、嵯峨大覚寺真言宗の僧。後、京都妙顯寺二祖）は従来、正和二年（一二三三）五月三日、十七才の時、侍者知覚・正覚・祐存の三人と、童子五人と共に、真言宗を棄て、日像の弟子になったと諸史料に記されているが、日像は正和二年より早く妙実を弟子としていた。

〔延慶二年、日像の付属状〕（寺院・僧侶の譲状）

伝授之

妙実上人

猶不能盡、以要言之、如来一切所有之法、（中略）

今此三界、皆是我有、其中衆生、悉是吾子、

例如今、佛將付上行等、當以此法付属於汝、仍為末代。

延慶二年（一二三〇）己酉七月八日

日像花押

「京都、妙顯寺文書」

妙実が日像に師事した時期が早まることは、それだけ三備（備前・備中・備後）えの布教が早まることを意味する。

正和二年説が判読誤、又は書誤りであるとすると、正和の年号から誤字を推定しなければならぬが、正和に似た年号に正応があり、和と応の字をくずすと和と応は似た字体となることから、妙実が日像の弟子となつた時期は、正和でなくて正応二年（一二三〇）ではなからうか。

妙実の備後布教

日像は、早くから妙実を法の相続者として認め、妙実は日像の期待に
応えて備前では多大の成果を挙げ、次いで備中・備後に教線を伸ばした
ようで、備後との関係について、水呑、妙顕寺の『妙顕寺由緒事』によ
ると、

〔貞享三年（一六八六）十二月二日。寺院の開創と寺の本末関係を
宗門奉行所え指出の控。〕（文章の途中一部分）

大覚は、恒に廻運弘経の志を盡して、大いに宗風を振わんと欲し、元
享。正中（一三二一〜一三二五）の頃より西邦に周遊し、当郷に適
むく、時に村で日は落ちて晩れ、よって宿を三原一乗（鍛治法華一
乗、妙性）の宅に乞う。『水呑町史・妙顕寺文書』

江戸時代に書かれたもので十分な信用はおかれないが、参考となるもの
で、妙実は鎌倉時代に布教に廻ったと記している。

その後の法華一乗に関する創作物語りとして、宝暦十年（一七六〇）の
『備後太平記』『鍛治法華一乗之事』、安永（一七七二）の始頃の『備
陽六郡志』『分郡之一・水呑村』、続いて『西備名区』『巻二十四、水
呑村・草戸村』に、水呑と草戸寺を混同し、面白く尾鱗をつけた法華一
乗が登場する。

鎌倉における宗論

日蓮は建長六年（一二五四）から、鎌倉名越松葉谷なごまつばがやに小庵を建て法華
堂と号し、弘長元年（一二六一）迄布教している。

この法華堂は後に、日朗・日印・日静と伝えられる。

名越松葉谷日印（文永元年〜嘉暦三年）と、十宗房が、十五才の執権北
条高時の前で宗論をしている。記録は日印の弟子、日静（永仁六年〜応
安二年。父は上杉頼重、母は足利氏で尊氏の叔父。京都、本国寺開山）が
記している。

〔文保二年、『鎌倉殿中間答記録』〕

御障子内、相模守平高時殿、長崎左衛門入道殿、其外他人数。

文保二（一三一八）戊午十二月二十日、長崎入道円喜息所において

問答のこと。（文章途中の一部分）

彼（十宗房）云、何にもあれ、御辺（貴殿）の法門（日蓮宗）は、

鍛治番匠の様なる云甲斐無者こそ信すれ、甲斐々々敷人は信ぜず。

答（日印）て云、御辺の法門は鍛治番匠は仏に成らざると云うや。

『改定史籍集覧』

日蓮宗は職人の信仰と攻撃すると、鍛治番匠の何が悪いか、とやりか
えず、鎌倉で日蓮集を受け入れたのは特権から離れた和賀江・由比ヶ浜
あたりの鍛治番匠だったことから、備後に巡歴して来た妙実が先ず鍛治

と関係を持つとしたことは無理のないことである。

康永元年の日像

日蓮が寂したのが、弘安五^{壬午}年(一二八二)で康永元年(一三二二)も同じ壬午の甲子(六十年で一廻り)の年にあたることから、日像は、身延山久遠寺(日蓮宗総本山)に登り、日蓮の塔を拜し、鎌倉比企ヶ谷の妙本寺(日朗開山、日朗寂所)をめぐる、武蔵池上本門寺(日朗開山、日蓮宗関東総本山)を過ぎ、故郷の下総国平賀に帰って、父母の墓参をすませて、初秋には京都に帰っているが、七十四才の日像には無理な長旅だったようである。

〔康永元年、日像の遺書〕

妙性(法華一乗)ト、妙法ト、妙理ト、香吉、満若、吉若、此六人ヲ御覧ミツイテタ(マ脱カ)ヒ候ハバ、命土(冥土)マテモ悦思奉可候。穴賢々々

康永元年十月廿六日

日像花押

僧都御房(妙実)

〔京都、妙顕寺文書〕

死を予期した日像は妙実に、妙性等の行末を依頼し、京都、妙顕寺で

同年十一月十三日に寂している。

前記、「妙顕寺由緒之事」の後文の一節に、

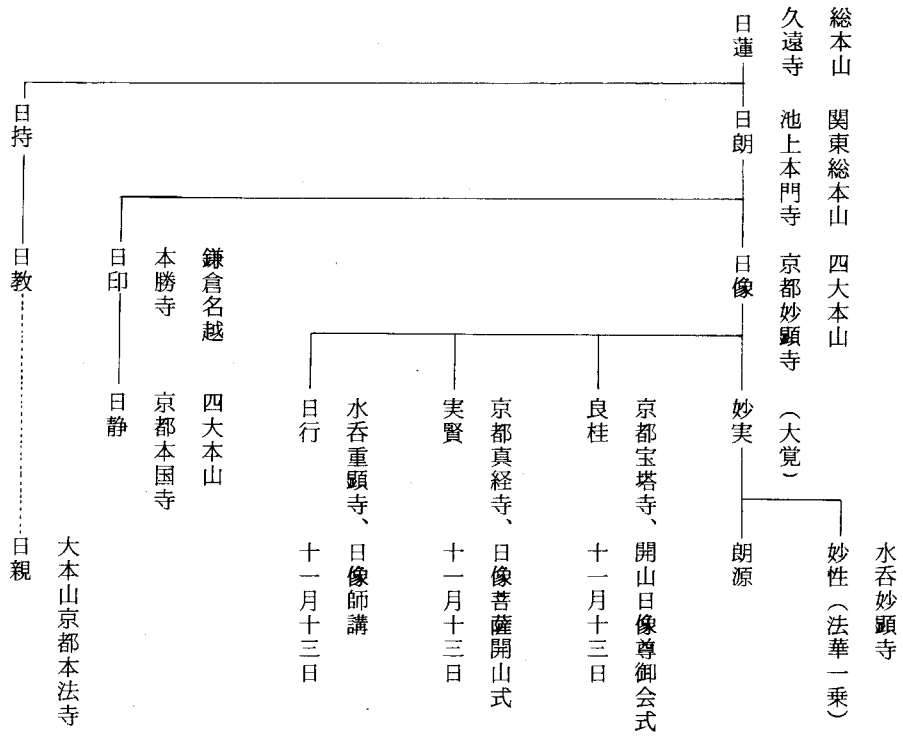
嘗て勇み鋭して、海陸の巨危を凌ぎ、悦然と本山の梵宮(京都、妙顕寺)に詣でて、礼を竭し欽蜜にして、像薩埵(日像菩薩)の座下に寓し、倍化行に遇う。

と記され法華一乗妙性は備後から、危険な道に堪えて上京し、京都、妙顕寺(元享二年の頃日像創建、日蓮宗四大本山)に詣でて、日像に出会い導かれたと記し、京都・水呑の両妙顕寺の記録は一致する。

延文元年(一三五六)四月、水呑・妙顕寺は妙性によって創建され、京都本山と同じ寺号を用い、創立迄の諸関係から系嗣を日像・妙実・妙性としている。

諸史料を集めて見ると、備後に日蓮宗を弘めたのは随に日像・妙実であるが、備後守護の長井氏は六条車大路に在京し、年貢請していた沼隈郡山南郷には浄土真宗光照寺(中国地方弘通最初の巨刹)が創建され、長和庄地頭の長井氏も在京して一族で四条烏丸簀屋の守護人を勤めている。この長和庄東方に日蓮宗が早く布教されたことは、鎌倉時代末期になると京都と備後沿岸部の交流は、想像以上に盛んであったことを物語るようである。

日蓮宗系統略図



妙 顕 寺